

ねー。」と声を掛けられていました。「こんな素晴らしいふれあいがあったんですね。」はじめて参加したという先生は、花植えの様子をしみりと眺めていました。

会員の参加意欲高揚に向けた、青年交流セミナーの新たな挑戦

20年間の活動歴を有するきも



青年交流セミナーによる川くだり(H20年8月)

べつ青年交流セミナーは、地域発信型の外向きの活動から地域の足元を見つめ直す内向きの活動に軸足を移してきました。今年4月の総会では、会員の参加意欲を刺激するため、互いの交流を深めることを目的とした新たな事業と、会員向け広報の発行に取り組むことが決定されました。地域活動に取り組み若い現役世代の組織である交流セミナーの今後について、事務局の白川博順さんにお聞きしました。

「会員が100名を越える大きな組織になっているけど、実活動に参加できるのは、決して多くはありません。運営委員であっても、本業や様々な事情で常時参加することはなかなか難しいんです。会員の多くは子育て世代です。共稼ぎがほとんどです。家庭の状況から言って、活動に頻繁に参加できないのも仕方がないと思います。そのなかで、参加できない会員に対して、セミナーが今何に取り組んでいるのか、どのような考え方で活動をしているのか、という情報を共有するこ

とが大切だと考えています。そこで、会員向けの広報を作ることにしたのです。それと今年度は、自分たちの交流と問題意識の共有に向けて、一緒に楽しみながら作業ができる活動をしたと思っています。たとえば、みんなでそばを植えて収穫し、そば打ちをしながら交流を図るとか。活動に参加する意欲をみんなが高められるといいなと思っています。」まちの屋台骨を支える次代のリーダーとして、家庭と地域活動をいかに両立させるか。青年交流セミナーの挑戦が続きます。

活動の復活に向けて準備を始めた、観光ボランティアの会

5年ほど前、観光協会が廃止され、それまでの事業が商工会などに引き継がれたりアウトソーシングされたりして、観光事業の枠組みが大きく変動した時期に、住民主体で観光案内活動を行うことを目的に、50名ほどの有志によって「観光ボランティアの会」が結成されました。ゴールデンウィークには中山峠の観光情報セ

ンターにボランティアスタッフが詰めて、町内や近隣の観光ポイントの説明をしたり、パンフレットを手渡したりしました。おそろいのロゴ入りウェアを調達するなど経費が生じたため、町から補助金が出ることになりました。しかし紆余曲折の中で、その後活動は停滞したままです。最近、新たな活動の場を創設することで観光ボランティアの会を復活させようとしている吉見啓一さんにお考えをお



観光案内窓口で活躍する観光ボランティアの会のスタッフ

聞きました。

「羊蹄山麓7町村の商工会と商工会議所が2年前から進めている観光ガイド育成事業が、ヒントになりました。私も受検しましたが、町内で受検し合格した人たちを中心に、今度市街地にできる郷の駅の情報センターで、ボランティアの観光ガイドができないかと思っています。また構想段階ですが、町の観光振興に何がしかの貢献をしたいのです。」活動が停滞したことの総括を受けて、新たな挑戦が始まろうとしています。

持続可能な協働に向けて

NPPOきもべつWAOの新たな挑戦

今年の5月から、NPPO法人きもべつWAOを中心に、エキノコックスの駆除活動が始まりました。「広報きもべつ」でも詳しく紹介しました(※1)が、住民有志が行政に提案して始まった事業です。住民が活動のボランティア組織づくりを進め、経費については行政が補助する、という連携に基づく

活動です。

従来から住民主体の活動を進めてきたNPPO法人きもべつWAO代表の山本浩一さんに、活動の意義についてお聞きしました。

「今年から5年間、毎月1回ベイト(※2)を散布し続けるこの活動は、WAOのメンバーだけでは持続が困難です。多くの住民が自分の都合がつくときにだけ交代で参加する方式で、活動を開始しました。生活や仕事と折り合いがつけられる範囲で、少しずつ地域活動に参加して欲しいと思っています。」また、ベイトの製造をニセコ町など近隣他町の住民活動と連携して行なうことで、個々人の負担を軽減する狙いもあるといま

持続可能な協働に向けて

これまで紹介した様々な住民活動の成果をもとに、共通の課題である参加者の世代交代を促す工夫が求められます。きもべつWAOの新たな挑戦は、世代交代を促す可能性のある試みの一つといえそうですし、リタイア直後の60歳世代の積極的な参加



ベイトづくりに集まったさまざまなまちの活動参加者



ベイト散布の様子

も期待されます。また子育て世代への支援として、本人や家族の努力を支える「仕事と生活の調和(ワークライフバランス)」(※3)の政策が、事業所や行政に期待されます。そして何より、青年交流セミナーの代表山岸康仁さんの言葉が、活動の相互支援に向けた強い意志を感じさせました。「他の活動団体が、たとえば高

齢化で人手不足になったというなら、交流セミナーができる範囲で参加しますよ。お互い出来るところで協力し合おうというのが、セミナーの活動理念です。住民と行政が地域課題を解決するために協力し合う協働を今後にも継続していくために、住民同士の組織を超えた相互の連携が、大いに期待されます。

【※1】「広報きもべつ」平成21年3月号の特集

【※2】キツネの体内からエキノコックスを駆除する虫下しを含んだ餌のこと

【※3】平成19年に厚生労働省が打ち出した少子化対策の考え方で、子育ての様々な段階で労働と生活の兼ね合いを自由に選べる社会の仕組みを実現することが、安心して子育てができる必須の条件である、ということです。